



富士通ソリューションセンター(大田区新蒲田 1-17-25)



蒲田工場村(吾等が村)ジオラマ

## 黒澤貞次郎と「吾等が村」

岡 茂光

・まえがき

昭和二八年(一九五三)一月二六日、黒澤貞次郎逝去、享年八三歳。翌日の新聞には次のような趣旨の記事が掲載された。「いまだき家賃がたった一五円、嘘みたいな話だ。

大田区の『黒澤商店・蒲田工場』の社宅である。その主、黒澤貞次郎さんが亡くなった。彼は長者番付の一位に上りつめたが、その目的は少しでも多くの税金を国に支払うという『報国』の熱い思いなのだ。黒澤さんは今の日本に何人と数えられぬ有徳の士である」。 (注：昭和二八年の大卒国家公務員の初任給は七六五〇円)

JR蒲田駅西口から京浜東北線に沿って横浜方面に向かって数分、近代的で瀟洒な「富士通ソリューションスクエア」の建物が目に入ってくる。ここが新聞記事の黒澤商店の社宅と工場の跡地である。社宅は黒澤貞次郎が目指した理想の田園都市として自ら「吾等が村」と名付けたが、通常は「黒澤村」として近隣庶民の憧れの社会だった。社宅に隣接して黒澤貞次郎が創業した国産タイプライター、

印刷電信機の工場が日本の近代化のひとつの具現としてそびえていた。

黒澤貞次郎が大正八年(一九一八)建設し操業を開始した国産タイプライター工場に牽引されたかの如く蒲田の田園地帯は大きな変貌を遂げていった。具体的には貞次郎に続き蒲田を拠点としたのが大倉孫兵衛、和親父子の「大倉陶園」、更には「高砂香料」「松竹キネマ蒲田撮影所」、「各務クリスタル」等、いずれも当時の日本人が夢と憧れを抱いた西欧の先進技術、文化を積極的に吸収せんものとの強い志を持った人たちに率いられた会社だった。共通の志を持った事業家が築き上げた先進的文化の香りは蒲田の街に伝播し「流行は蒲田から」とまで呼ばれるようになっていった。この時代の文化、風土を「蒲田モダン」と表現されているが、その中心的存在であり牽引者が黒澤貞次郎だった。

・生い立ちからアメリカへ発つまで

黒澤貞次郎は明治八年(一八七五)東京の日本橋大門通り、現在の蠣殻町(かきがらちよう)近辺で生まれた。七歳の時に母を亡くし、小学校を中退して丁稚奉公に出されるほど家は貧しかった。勤勉な貞次郎は小学校で飛び級を許されたほど優秀な子だったのだが、或る日、彼にとつて衝撃的な事件が国語の授業で起こった。誰もが手を挙げな

い中、「嘔む」という字をただひとり黒板に書いた貞次郎が意気揚々と席に戻ろうとしたとき、先生から意外な言葉が発せられたのだ。「黒澤君『嘔む』の字そのものは合っていますですが書き順が間違っていましたね」。

貞次郎にとって思っても見なかった事態、彼のプライドはいたく傷つき悔しさがこみ上げてきた。しかし、同時に彼の脳裏には全く別の考えが閃いたのである。「日本語はカタカナ、かな文字に加え数限りない漢字がある。なんでこんなに複雑なのだろう。それに比べれば英語は単純明快アルファベット二六文字で全てが足りてしまう。きっと将来は日本でも英語が必要になるはずだ」。このとき日本は文明開化の香りが未だに残る明治時代、貞次郎わずか一〇歳にして英語の重要性、必要性に着目したのだった。

小学校を中退した貞次郎は日本橋の菓問屋に働き始めたが、当時の唯一の楽しみが英語の独学だった。丁稚には給料はない。盆暮れに貰う小遣いは全て英語の独習本に費やされ、寸暇を惜しんで英語の勉強を続けた。明治二六年（一八九三）一八歳の貞次郎は丁稚から番頭へ昇格、商人にとつて最も晴れがましい日を迎えた。しかし、主人の前に手をついた貞次郎は意外な言葉を口にした。「番頭への出世、身に余る光栄にございます。しかしながら私はここで暇乞いをさせて頂きたくお許し願います。何故なら、

私はアメリカに行き見聞を広めたいのです。つきましては番頭の羽織、袴の代りにいくばくかの支度金をいただけないものでしょうか」。

#### ・タイプライターとの出会い

渡米に際して貞次郎は具体的な目的を持っていたわけではなく、漠然と英語という言葉話を話すアメリカ人とその社会を見聞したいと思っただけだった。まさか、アメリカの地で生涯の伴侶となるタイプライターと出会うとは夢にも思っていなかった。

最初の地は西海岸のシアトル。そこで貞次郎が得た職と言えば、農作物の穫り入れ、水産物の水揚げ等の過酷な肉体労働であり、労働の対価は驚くほどに安かった。そんな或る日、「東は豊か」の広告を目にした貞次郎は即座に大陸横断鉄道に乗り込みニューヨークに向かった。自分が一旦思ったら直ぐに行動に移す。黒澤貞次郎の最大の長所がタイプライターとの距離を一気に縮めていった。

明治三〇年（一八九七）、貞次郎はニューヨーク郊外の家庭に住み込みとして働き始めたのだが、その家の主人が貞次郎の運命を大きく変えていくこととなる。主人の名前はエリオット・スミス氏、当時アメリカで有名なエリオット・ハッチ・ブック・タイプライター社の経営者だった。

エリオット家の子供たちを通学の送り迎えをする過程で貞次郎はタイプライターがアメリカ社会になくてはならぬ文明の利器であることを肌で知った。「タイプライターはアメリカ社会の必需品。役所、会社はもとより学校までも！日本にも近い将来同じような時代が来るに違いない」。

#### ・かな文字タイプライターの開発

エリオット社で見習い工として働きを許された貞次郎は、タイプライターのキーの数に注目した。キーの数はわずか五〇に及ばないにもかかわらずシフトキーによる変換機能を活用することで大文字、小文字のアルファベット、更には数字、ピリオド、コンマ等々、英語文章を作成する全ての機能を有している。貞次郎は呟いた。「日本語のカタカナ、カナ文字は五一文字だ。ならば同じようにシフトキーの変換機能を使えば日本語のタイプライターを作れるかもしれない。いや、作れるはずだ！」。

貞次郎の鋭い着眼に敬服するのはまだ早い。驚きはこれだけではなく彼は活字の向きを九〇度横に置き換えることで日本の縦書き文章をタイプライターでも可能にしてみせたのである。明治三二年（一八九九）、エリオット氏の家に住み込んでからわずか二年後、貞次郎はかな文字タイプライターの試作に成功、翌年にはカタカナタイプラ

イターの試作にも成功した。約七年間のアメリカ滞在、大きな収穫を得た貞次郎は日本でのタイプライター普及を夢見みて帰国の途についた。お土産はエリオット製タイプライター一〇台と同社製品の日本での販売権だった。

#### ・黒澤商店創立と銀座本店、ビル建設

明治三四年（一九〇一）薫風香る五月、貞次郎は京橋弥左衛門街（現在の銀座並木通り）に二〇坪の小さな店舗を構えた。店員は貞次郎ひとり、店には机代わりにミカン、リングの空き箱が重なり合っていた。これが日本で最初のタイプライター販売・サービスを生業とする黒澤商店の姿だった。「店は粗末でも極上の仕事を！」、貞次郎の想いは部屋の片隅に置かれた卓上旋盤に込められていた。これは、部品の交換が必要なときは、自らが製作してお客様の要望に応えるためのものだった。何よりもお客様のサービスをモットーとする「黒澤精神」の原点である。

タイプライターが日本社会に徐々に浸透し始めた明治四一年（一九〇八年）、貞次郎は再びアメリカに赴いた。最大の目的は大地震に見舞われた被災地サンフランシスコの实地検証だった。何故なら、貞次郎は銀座大通りに面した六丁目に土地を購入し、耐震性に優れた近代的本店ビルの建設を思い立ったからだった。

明治四二年（一九〇九）、起工式が行われた本店ビルの工事は完成までに三年もの年月を費やした。その理由のひとつが建築にかけては全くの素人の黒澤貞次郎が自ら設計図を描き、実際の工事の陣頭指揮をも執ったからである。貞次郎の並外れた努力と執念で完成した日本初の鉄筋コンクリートオフィスビルの黒澤本店は赤レンガ造りの洒落た外観で注目を浴び銀座の象徴として皆に親しまれていった。関東大震災にもビクともしなかった堅牢を誇ったビルの秘密の一端が昭和五三年（一九七八）の本社ビル建て替えのときに明らかになった。

本店ビル解体が本格化してきた或る日、工事関係者は壁の中から異様な鉄材が大量に出てきたことに驚いた。「なんだ、これは？」。鑑定の結果、この鉄材は東京電気鉄道（のちの市電く都電）が路線レールの交換した時の廃棄レール（欧州製）であることが判明した。専門家でさえ考えも及ばぬ耐震強化のレール活用、更には現代にも通じる廃棄物リサイクル、貞次郎の斬新な着想には驚きを禁じ得ない。

### ・「吾等が村」の建設

本店ビル完成の僅か二年後（大正三年、一九一四）、貞次郎は蒲田駅ほど近くに二万坪もの広大な土地を取得した。同時に彼は自宅を築地から蒲田に移し、究極の夢であ

る理想の田園都市、自らが名付けた「吾等が村」の建設に粉骨砕身した。

貞次郎はアメリカ滞在中にイギリスで生まれた新たな職住接近の都市（田園都市）がアメリカにも生まれていることを自分の目で確かめ、いつの日か日本で実現したいと強い願望を抱いていた。彼は自分の想いをこのように綴っている。「都市生活の幸せは自然と文明の調和によってもたらされるものであるべきだ。生活の地は蒲田にあり！この地で田園都市の恩恵を享有するところに『吾等が村』の理想がある。現実を離れざるユートピア（理想郷）、工場で働く人々の生活を豊かにすることこそ私の究極の夢なのだ」。貞次郎が蒲田を選んだ背景の大きな理由が都心からの利便性にあった。すなわち明治三七年（一九〇四）蒲田に東海道線の駅が完成、大正三年（一九一四）に京浜線（今の京浜東北線）が蒲田に停車することになり都心からきわめて便利な土地となった。

貞次郎自らプランニングと建設工事の先頭にたった工場と「吾等が村」の建設は次ページにある通り、驚くべきスピードで進められた。その中で、貞次郎の頭を最も悩ませたのが蒲田の水質の劣悪さだった。この難問を解決するため貞次郎は多摩川から清冽な水をひくため休む暇なく周囲の地勢を自分の足で調査した。土地取得から九年後、

「吾等が村」の各戸の蛇口からほとばしる清らかな水を見たとき大きな歓声が村に響き渡ったという。

- ・大正三年 (一九一四) 蒲田に土地二万坪取得(貞次郎三九歳)
- ・大正四年 (一九一五) 貞次郎、自宅を築地から蒲田に移す
- ・大正五年 (一九一六) 工場建設開始、治水工事検討開始
- ・大正七年 (一九一八) 工場操業開始
- ・大正九年 (一九二〇) 黒澤幼稚園設立  
水源地从ら村の貯槽に水が引かれる
- ・大正一〇年 (一九二二) 社宅、菜園等完成
- ・大正一二年 (一九二三) 各戸への水道配管完了

「吾等が村」には工員と家族のための社宅、共同浴場、菜園、公園、子供用プール、テニスコートに加えて幼稚園と小学校の施設が完備された。当時、「吾等が村」の近くには黒澤貞次郎の呼びかけにこたえるかのように大倉陶園、高砂香料、松竹キネマ蒲田撮影所、新潟鉄工所等が進出した。池上線も蒲田と池上間が大正一二年(一九二二)開通、同年、蒲田は村から町へと町制施行が成された。このように蒲田が近代化に変貌していく先人的役割を担ったのが黒澤貞次郎であった。

### ・「吾等が村」での生活

昭和一五年(一九四〇)六月一九日のアサヒグラフに当時の「吾等が村」の詳細記事が掲載された。

「物資不足、物価高の嘆きをよそにノビノビと満ち足りた明け暮れを送っている平和な理想郷が帝都の一角の工業地帯、蒲田の御園村に存在している。そこは黒澤タイプライター蒲田工場、敷地は二万坪、通称「黒澤村」(「吾等が村」と呼ばれ付近の住民から羨望的とされている。

午前七時半、工場始業のサイレンが鳴り渡る。遅刻者は皆無である。自宅の隣が工場だからだ。午前一〇時、休憩のサイレンと共に工員さんたちが工場から青空の下にてくる。ベンチに腰を下ろし紫煙をくゆらせている者もいれば工場前の菜園で鋤を入れている人もいる。工場は自宅の延長であり、自宅即工場の生活を住民は謳歌している。村の建設者であり主でもある黒澤貞次郎氏を家長とした大家族主義の和やかなユートピアである。ここには定年制がない。七〇歳を過ぎた老人も元気に仕事している。夫婦仲良く働いている人も沢山いる。

お昼は工場の食堂に集まって皆で取る。すぐ近くの自宅で昼食も出来るのだが殆どの工員は会社から支給される昼食を皆で食べながら会話を楽しんでいる。午後五時帰途につく。楽しい夕食の時間だ。時には会社の食堂で東京「風月堂」仕込みのコックが作ってくれるメンチカツ、コロツケ等を夕食のおかずを持ち帰ることもある。

楽しい我が家は三つのタイプに分かれ平均が六畳と四畳半、青葉に囲まれた清々しい庭も広がり、この辺ではま

さに高級住宅である。そして家賃はたった四円（大正一〇年当時）。水道光熱費は会社が負担してくれる。戸数は一三、人口は約八〇〇人、従業員子弟のために幼稚園と小学校（昭和四年開校）も完備され八七名の小学生と三〇名の園児が六名の先生と二名の保母さんに見守られ遊びに勉強に嬉々としている。村の中央に公園があり夏になると子供用のプールに水が入って楽しい遊び場となる」。

黒澤貞次郎を頂点として働き甲斐、生き甲斐に恵まれた「吾等が村」は「黒澤村」とも呼ばれ世間の羨望の的となったのである。大正一〇年（一九二一）視察に訪れた床次竹次郎内務大臣と近衛文麿侯爵は「吾等が村」を他の追従を許さぬ理想的な社会と絶賛した。

#### ・タイプライターと電信事業への貢献

ここで黒澤貞次郎が日本の近代化、事務効率化に果たした貢献を紹介しよう。

彼がアメリカから持ち帰った文明の利器、タイプライターは日本社会に徐々に浸透し官公庁はじめ多くの企業、学校等の事務効率化を後押しした。昭和一六年（一九三二）は貞次郎にとって忘れられぬ年となった。貞次郎は宮内庁（当時）から生物を研究していた昭和天皇がファイリングのために通常よりも小さなアルファベットとカタカナ

の字が可能なタイプライター製作の依頼を受け、特注品を製作し謹んで献上したのだった。

日本の電信業界の歴史を振り返ると、黒澤貞次郎の貢献なくして発展はなかったと言っても過言ではない。具体的に貞次郎は電信業界の発展に主にふたつの側面から偉大な業績を残した。ひとつは電信用和文タイプライターの開発、国産化であり、ふたつ目は国産和文印刷電信機（和文テレグラフイックタイプライター）の開発と実用化である。

明治から大正初期にかけての電信業務の課題は着信電信をいかに短時間に鮮明で分かりやすく書き留めるかにあった。この課題を解決したのが貞次郎による米国、スミス式電信用和文タイプライターであり、のちに「アズマタイプ」のブランドネームで蒲田工場において製造されるようになった。

時代は昭和初期、通信省の依頼に応え貞次郎は電信業界最大の課題であった自動化達成のための国産和文印刷電信機（テレタイプライター）の開発に成功した。昭和二二年（一九三七）通信省は東京〜大阪間で貞次郎製作の和文印刷電信機の実用に踏み切り、以降、新聞社各社も追隨し日本の通信業務のスピードアップと効率化が飛躍的に向上したのである。

## ・貞次郎のビジネス理念

『Everything best in office appliances』、これが黒澤商店の標語である。日本語に訳せば「事務用品の最善のものは何でも」となるのだろう。会社の標語というものはとかく抽象的な文字が多い中で、黒澤商店の標語は極めて具体的であるので新鮮な響きと明確な意思が伝わってくる。

貞次郎の想いは「事務用品の最善のものは何でも提供し、最善のものでなければ扱わぬし、最善のものでない限り儲けてはならない」であった。彼は常々このように話していた。「商人にとって儲けは第二であつて社会奉仕が第一でなければならぬ。あくせくと儲けに走ってはいけな。『Slow but sure』、遅くとも堅実でなければならぬ」。蒲田工場の壁には貞次郎直筆のメッセージ「買う気で作れ」が貼られていた。貞次郎の根底にはお客様あつての我々、「お客様第一主義」の思想が強く宿っていた。

## ・生粋の“銀座マン”、貞次郎

黒澤本店の本店は銀座大通りに面した銀座六丁目にある。その主、黒澤貞次郎は銀座の人たちにどのように映っていたのだろうか。

「大正から昭和にかけて映画監督、脚本家、随筆家として活躍し、食通としても知られた山本嘉次郎氏は銀座と街を支える銀座マンについて次のように語った。

「銀座は明治維新、関東大震災、第二次大戦の爆撃と途方もない荒波を三度も受けながらも立ち直り、今でも日本のシヨールームとして君臨している。それを可能にしたのが真の銀座マンが持つ『銀座魂』があつたからこそである。『銀座魂』とは「士魂商才」（武士の心と商人の英知）と『和魂洋才』（日本人の誇りと西洋の先進頭脳）が合わさつてこそそのものなのだ。生粋の銀座マンとは銀座魂を心に宿し、紳士としてのダンディズムを自然体で発散させる男の中の男である」。

あるとき著名な文化人による座談会が行われた。テーマは「生粋の銀座マンは誰か？」だった。侃々諤々（かんかんがくがく）の議論は結論を得ないまま全員が疲労を覚え沈黙が支配したときのこと、一人がふと口にした。

「おい、誰か大事な人を忘れちゃいないか？ 外面ばかりに気を取られていたが・・・、クロさんはどうだ？」

「クロさんて・・・、あつ、六丁目の黒沢タイプの貞次郎さんか！ 確かにそうだな。着ている服はいつも名前

と同じ黒ばかりだったので気がつかなかったが、いつもパリつとした新調同然の背広だよな」。

「いつも同じ色の背広だからってお洒落じゃないとは言えないぜ。クロさんと同じ蒲田で売り出し中の映画監督小津安二郎の家のタンスの中はチャコールグレーの背広ばかりがずらつと並んでいるそうだ」。

「貞次郎さんの交詢社の話しを知ってるか？ そうだ、クロさんだな！ 生粋の銀座マンは」。

ここは銀座の交詢社、明治一三年（一八八〇年）福沢諭吉の呼びかけにより、日本で初めて設立された実業家社交クラブである。暮れなずむ夕刻、バーテンダーは「そろそろ、いらつしやる頃だ」と胸の内で呟いた。と、そのとき、いつものように黒のスーツに磨き上げた黒の編み上げ靴、穏やかな笑みを浮かべて黒澤貞次郎氏がカウンターに歩み寄ってきた。注文は聞かずとも分かっている。冷えたグラスに細やかな泡、琥珀に輝く生ビールが置かれ、その横には小皿に盛られた塩が用意された。おもむろに貞次郎は内ポケットから白いハンカチを取り出しカウンターで広げると瑞々しいキュウリが顔をのぞかせた。グビツとビールを一口、続いて新鮮なキュウリをかじる音がバーテンダーの耳に心地よく入ってきた。

「貞次郎様の菜園のものでしょうか？」

「今朝の収穫でね、この頃はこれが楽しみだよ。旬のキュウリは格別だね」。

### ・報国の想い

黒澤貞次郎の生涯は仕事と労働に捧げたものであり、一月一日以外は休まず働き続けた。しかし、そこには仕事に追いまくられたとの悲壮感、余裕のなさは微塵にも窺えない。それは、貞次郎が持っていたきわめて強い「信ずる心」すなわち己を信じ、家族、仲間、そして国を信じて愛する心を持ち続けていたからだと思う。貞次郎には祖国、日本のために尽くす「報告の想い」を強く意識していた。

貞次郎は「報告の想い」を「納税」という形で実践した。「納税は美德なり！」、貞次郎はこの哲学のもとに商売上で得た利益の中から出来る限り多くを国に還元した。従って、専門家から勧められた、節税のための法人化に対し頑として首を縦にふらなかつた。「私の目の黒いうちは店の法人化、つまり節税のための組織に変えることは許しません」。

戦後、黒澤貞次郎は日本の長者番付の一位に上りつめた。勿論、納税額は飛びぬけた一位であった。貞次郎は何も長



者番付の首位になりたいと思っただけではない。彼は一銭でも一円でも多くの税金を払うことこそが自分にとっての「報国」の想いの実現だったのである。

大正から昭和にかけて、黒澤貞次郎はじめ蒲田に集まった気高き意志を持った先人たちの努力によって日本は西欧諸国に一步一步近づいていった。その先人たちの心意気を現代に生きる我々は決して忘れず、自分たちが社会の為に出来ることを実践すべきなのではないだろうか。

完

参考資料… 黒澤オサムウェブサイト

…「蒲田モダン」人物伝 黒澤貞次郎 大田観光協会